

80歳で文学賞を初受賞した方は遺愛の卒業生です！！

千田佳代（せんだかよ）さんという方をご存知でしょうか？ 千田さんは今年の6月に『猫を祭る』という小説で、小島信夫文学賞を80歳という年齢で受賞した作家です。国内の文学賞を初受賞された方としては最高齢の方です。

この方、実はK2回生ですから、遺愛を昭和25年に20歳で卒業されました。本名は星野よしこさん。生い立ちを追ってみると、子供の頃から苦勞された方でした。3歳の時に、子供のいない叔母の養女になり、函館で育ちました。3歳なら物心ついていて、かなりショックを受け、精神的にひきずるものがあったのではないかと思います。第2次世界大戦の終戦1ヶ月前の昭和20年の7月14日に函館空襲があり、遺愛在学中の15歳だった星野さんは、自宅の玄関で、アメリカ海軍第3艦隊のグラマンの空襲にあい、足に機銃射撃を受けました。この空襲は、狙いは青函連絡船を攻撃することでしたが、市内も攻撃され、火災も含めて400戸が罹災し、少なくとも79名が亡くなりました。星野さんは病院に運びこまれますが、外科医は戦地にかり出され、治療していたのは耳鼻科のお医者さん、1年後に退院しますが、杖がなくては歩けなくなっていました。大変なショックだったと思います。戦争の傷のために20歳で遺愛を卒業したあと、演劇に関わりたいという夢をもって、当時、日本を代表する演劇作家の木下順二（『夕鶴』で有名ですが）のもとで演劇を学ぶために明治大学に入学します。卒業後は東京の音楽の楽譜の出版社に就職し、64歳まで勤めました。その間、同人誌で小説やエッセーを書いたり、俳句を読んだりもしました。恋人がいたそうですが、結婚せずに叔母さんの家で40年間過ごしました。

60歳前に1人暮らしなり、東京都内に74歳まで住んでいました。6年前に神奈川に移り、小さな豹のようなオス猫（名前はナイルと言います。）ナイルと一緒に住むようになります。2005年からのその様子を小説にしたのが、受賞した『猫を祭る』でした。そのなかの一部を紹介します。…昔の恋人や友人たち、亡くなった人の夢ばかり見ていたのに、「ある朝、夢を見なくなったことに気づいた。」ある日、玄関前で転んで背骨を圧迫骨折する。激痛に耐えてベッドに横になると、ナイルが飛び乗ってきた。「あまりの痛みに涙がにじんだ。久しぶりの涙だった。ナイルはしだいに私の目じりに近づくと涙をなめた。—あなたはほんとうに猫なの？—猫が次第に別な生き物になっていく。小さいが愛しい仲間。増してくる痛みを耐えながらうつ伏せになり、枕に顔を押し付け、声を殺して泣いた。弾を受けた時も泣かなかった私が、泣いた。（この弾とは、15歳のときにグラマンによって被弾した弾のことです。）老いるということは、とても心ぼそい。分かり切ったことではないか。…老いへの不安と心細さが率直に語られ、猫がそれを癒してくれ、かけがえのない存在になっていることが見事に描かれている作品です。

星野さん（ペンネーム千田さん）の小説と歩みとから、老人の孤独な生活体験をしているからこそ書けた小説であり、人生の輝きは80歳過ぎてもやってくるのだ、と感じました。

2010年9月28日



YWCA が老人ホームでホ'ランテイア